カール・ロジャーズの心理療法論再考：
著作 Client-Centered Therapy に見る観察事実と概念

池見　　陽・峰山　幸子*・高地　知子*
蓮沢　典子*・永井　智子*
*（人間科学研究科 博士前期課程）

Summary

Reconsiderations of Carl Rogers' Psychotherapy Theory:
Concepts and Observations in *Client-Centered Therapy*

IKEMI Akira, Ph.D., MINEYAMA Sachiko*, TAKACHI Tomoko*,
HASUZAWA Noriko*, NAGAI Tomoko*
* (Graduate School of Human Sciencies)

The psychotherapy of Carl Rogers is being reconsidered and reevaluated in many ways in recent years. This tendency may be due, in part, to the fact that the year 2002 marks the centennial of Carl Rogers' birthday. Kobe College will be hosting a Carl Rogers' Centennial Symposium at the occasion of the 21 st Annual Convention of the Japanese Association of Humanistic Psychology scheduled for September 2002. In this paper, reconsiderations of Carl Rogers' Client-Centered Therapy is presented, focusing on Carl Rogers' noted book published in 1951, entitled *Client-Centered Therapy*. By examining the clinical observations Carl Rogers' made in the book and the concepts he presented, the authors drew several conclusions about Rogers' theory, which include the following. Firstly, Rogers emphasized the attitudes or presence of the therapist, sacrificing to some extent, technical elaborations which were needed to explain certain clinical phenomena, particularly the therapeutic significance of the technique of "reflection". Secondly, the authors concluded that such over-emphasis on therapist attitudes might have been historically important in 1951, which preceded the human rights movement. Thirdly, the authors observed that Rogers used the phenomenological method in building his theories, although "phenomenology" is never mentioned in this book. Fourthly, Rogers observed, but did not build concepts around certain areas which he deemed were vital to therapy, such as what is now referred to as "felt sense" and "carrying forward". Fourthly, the book shows clearly that Eugene Gendlin later followed up Carl Rogers in building concepts and theories around Rogers' observations for which Rogers himself did not address. These are the observations regarding the significance of "reflections", "felt sense" and "felt shift" and the relationship between sensory experience and symbolization. Therefore the works of Eugene Gendlin is not a development outside the Client-Centered movement, but can be seen as a direct development of Client-Centered Therapy. Finally, the authors observed the humanistic concepts in Carl Rogers, particularly in his observations of the self-actualizing potential, which departed from the traditional psychoanalytic view prevalent at the time.

1．はじめに

ロジャーズ再考

近年になって、心理療法家カール・ロジャーズ（Carl R. Rogers：1902～1987）の理論と実践を再検討しようとする動向が国際的に顕著になってきている　(Farber, Brink & Raskin 1996、　近田2001、保坂1988、久能他1997、村瀬1997、田畑1998、氏原・村山2000など)。その背景にはいろいろなことがあろうが、2002年がロジャーズ生誕100年にあたることもその大きな要因の一つであろう。ロジャーズ生誕100年を記念して、神戸女学院大学では第21回日本人間性心理学会開催に際して、カール・ロジャーズの娘で著明な心理臨床家であるNatalie Rogers博士を迎えて、カール・ロジャーズ生誕100年記念シンポジュームを予定している。同様の趣旨の記念行事がアメリカを中心に、あちこちで企画されているが、確かにカール・ロジャーズはアメリカが生んだ歴史的な心理療法家であったと言えよう。

生誕100年は一つの機会であろうが、ロジャーズの理論を見直す動向の背景には他にもいくつかのことがあげられよう。一つには（そしてとくに日本では)、ロジャーズ文献の中でも初期の「非指示的カウンセリング」があまりにもインパクトが強く、そこから1957年の「必要十分条件」までの理論が一般にロジャーズの理論として普及してしまっている傾向があることがあげられよう。そのため、ロジャーズ後期の考えが影に隠れてしまった感があり、それを発掘することで全体像を掴もうとする傾向がある。また、国内の事情として、ロジャーズの理論や実践を紹介してきた著明な日本の研究者・実践家たちが大学を定年退官するなど、ロジャーズ研究も世代交代期を迎えていることがあげられよう。

世代交代という点からみて、あの著明な1957年論文以降、ロジャーズの理論や実践はどのように変化し、それを誰が継承し、どのように発展させていったのだろうか、という「ポスト・ロジャーズ」の問題も関連してくる。クライエント中心療法はロジャーズが築いた一つの柱であるが、ロジャーズは彼のキャリアの後半からはエンカウンター・グループを精力的に研究し、実践していった。エンカウンター・グループ以外の発展としては、体験過程理論とフォーカシング（フォーカシング指向心理療法）を考案し、発展させているジェンドリン（Gendlin, E.）の存在も国際的に大きくなってきている。日本的に言えば「ロジャーズの弟子」の一人であるジェンドリンの業績は今や国際的に広く認知されるに至った。ジェンドリンの業績がロジャーズに出発したことは事実であるが、はたしてジェンドリンはロジャーズの仕事を「継承」していったのであろうか。その視点に立てば、フォーカシングや体験過程理論はクライエント中心療法の「発展」と見なされるべきである。しかし、この視点はすべての研究者や実践家によって必ずしも共有されているわけではない。もともと心理学が専門ではなく、哲学の研究者であったジェンドリンは、発想の前提からしてロジャーズとは異なっていると指摘することも可能であろう。その視点に立てば、フォーカシングはクライエント中心療法とは別種のものであるということになるだろう。その中間の考え、すなわち、ジェンドリンの業績はロジャーズ

に出発し、実践の基礎を共有しているものの、後にロジャーズの理論とは違った方向に独自に発展していったという見解が一般的であろう。いずれにしても、フォーカシングがクライエント中心療法から出発したことは歴史的な事実である。フォーカシングの側からクライエント中心療法を振り返ってみると、どのようなことが見えてくるのであろうか。

このように、ロジャーズ生誕100年にあたって、いくつかの視点でロジャーズ理論を再考していくことができるが、本論では上記のような課題をも考慮に入れながら、ロジャーズが「クライエント中心療法」を旗揚げした1951年の著書「クライエント中心療法」(*Client-Centered Therapy*) を読み、ロジャーズの理論はいったいどこから生まれたのかといった、発想の原点をまずは探ってみたい。この書物はロジャーズが「クライエント中心療法」を旗揚げした書物であるばかりでなく、あの著明な1957年論文 "The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change" (Rogers 1957) に先立つ著作であり、その論文で展開される著明な治療概念がどのように着想されたのかを考えるうえではもっとも貴重な書物であると言えよう。このように、ロジャーズ理論の原点となる観察事実やそこから生み出された概念を検討することによって、観察事実と概念化の関係を見ることができるだろう。また、観察事実と概念化の関係を見ることによって、後のロジャーズ理論やロジャーズ理論に続く体験過程理論などとの関連も見られるかもしれない。

さらに、ロジャーズの著作の翻訳は古い、正確ではない、などといった指摘があることは周知の事実である。最近の新しい翻訳「ロジャーズ選集」(伊東　博、村山正治　監訳　2001) が出版されるまでは、翻訳にも問題があったことを事実として認識して、本論では原文を読み、翻訳の問題点などにも留意しながら作業を進めることにした。

著作「クライエント中心療法」と本書の検討範囲

カール・ロジャーズの代表作と言われている著作の一つが「クライエント中心療法」*Client-Centered Therapy* (1951) であり、1951年にアメリカ合衆国で発行されている。本書の題目は「クライエント中心療法」となっており、言うまでもなく、本書は心理療法の一種である「クライエント中心療法」の中核的な発想をまとめたものである。また、「自己一致」「共感的理解」「無条件の肯定的関心」といったカウンセリングの促進条件が提示される1957年の論文よりも6年早く発行されている本書は、1957年論文の先駆けとしても注目される。

本論では、この著作に焦点をあて、とくにロジャーズ自身が執筆している心理療法関係の各章について (ロジャーズの他には Axline, V. などがクライエント中心療法の応用部分を担当して分担執筆している) 論説を以下に展開し、最後に総合考察を提示する。

2．カウンセラーの「態度」とオリエンテーションについて (第1章、第2章)

ロジャーズが「態度」を強調した背景と当時のアメリカ文化

「まえがき的」な第1章が提示されたあと、著作 *Client-Centered Therapy* では、第2章、"The

Attitudes and Orientation of the Counselor" から論が展開される。本書の実質的な意味での第1章はこの章に始まると言えるだろう。

本章では冒頭に、これまでのロジャーズ自身によるカウンセリングの概念化があまりにもテクニックを強調していた点への反省がなされている（"...earlier presentations tended to over-stress technique"）。そしてカウンセリングの効果はテクニックよりも、むしろカウンセラー個人の中に定着している統一された態度 （"a coherent and developing set of attitudes deeply imbedded in his personal organization..."）であると仮定している（p.19）。この一連の「態度」（attitudes）については第1章にも述べられており、本章においても、かなりの字数を用いて検討がなされている。それは、本書から6年後の1957年に提示されるロジャーズの著明な仮説の先駆けとして注目してもよいだろう。

この「態度」とは、平易な表現で言うと「クライエントを尊重すること」であると言えよう。そしてそれは、クライエントによる自己決定や自己方向性（self-direction）が肯定的で成長的であるという認識でもある。このことは今日においては当然と思われるかもしれないが、1950年代のアメリカを考えてみると、このことは画期的な考え方だったのである。そのため、十分な字数をさいて説明がなされている点もうなずける。すなわち、当時のアメリカには今よりも強い科学万能主義や科学に対する期待が定着しており、カウンセラーは「科学者」であり、「専門家」であり、ある種のクールで冷酷な科学的視点や態度をもって、患者に接することが一般的とされていたのである。患者が自己決定する、というよりも、患者には科学的な根拠を基にアドバイスすることが一般的であった。さらに、患者は「疾患の一例」として扱われていた傾向も強かった。このような態度や考え方を変え、「個の尊重」を訴えようとしている意気込みが本章から読み取れる。事実、患者を「クライエント」と表現したのもロジャーズであったことはいうまでもなく、本書の題目もこれを主張した形になっている。

ところで、本書を読むにあたって、本書が執筆された時代を考慮しておく必要がある。この時代、特に精神的な疾患をもつ患者は一般的に差別的に見下されていた傾向があった。また、1950年代は人権運動もまだ完全に発展していない時代である。黒人や有色人種と白人との憲法の下での平等を認めた連邦最高裁の判例の多くは1960年代になされたことを覚えておかなければならない。このような時代背景の中で、ロジャーズは第1章（p.5）では、彼の一連の考え方のルーツはアメリカ文化の教育、社会、政治哲学にもみられることを述べ、「民主主義の行進」（*Democracy on the March*）という書物をわざわざ脚注に入れて紹介している。また、本章の後半部分では8ページにわたって、経営や産業心理学、教育心理学などの他領域においても、同様の考え方がとり入れられてきていることを強調している。すなわち、非行少年や精神科疾患の患者などは指示を与えなければ、自らの力で良いものを見出すはずがないとされていた文化において、「個の尊重」や自己方向性（自己決定）を提示したロジャーズの発想は、自由と平等を謳ったアメリカ的デモクラシーの一端として、社会思想、教育思想や政治哲学の中にも位置付けられるのである。ロジャーズがここで力説していることは、当時のアメリカ合衆国に芽生えはじめ、後に人権運動や反戦運動にも発展していった大きな発想の先端であったと

筆者らには読めるのである。

ロジャーズの「現象学」

クライエントの尊重という発想からか、本章（本書）のデータはクライエント自身の体験報告（内省報告）によるところが多い。ロジャーズは現象学的な方法論を用いていることになるが、本章には「現象学」という表現は見当たらない。現象学的な探求をしていることに気付いていたかどうかは別の課題として、ロジャーズは逐語記録やクライエントの体験報告を妥当な研究の方法として第１章（p.７）で位置付け、それを「科学的」仮説の基盤としたのである。このように、ロジャーズはクライエントの発言や体験報告は治療理論を考察するうえでは強い影響力をもつものとして、本書では（そして後のロジャーズの著作でも）それらのクライエント体験から概念化を行うというスタイルを一貫して採用したのである。

ロジャーズの治療的あり方と技法

治療において、ロジャーズが強調していた態度は「クライエントの目を通して見る」ことであり、また、クライエントの苦悩を、成長へのプロセスの一部とみることであった。そのため、個によって発動する自らの方向性を信じることの重要性が強調された。これは「暖かさ」(warmth）や「受容」(acceptance）を伴うものであるが、本章ではまだ「共感」(empathy）という言葉や「無条件の肯定的関心」、「受容」という言葉は術語としては見られず、一般的な用法で利用されている。不思議なことに、本章では、後に「自己一致」(congruence）や「純粋さ」(genuineness）と概念化される態度についての論及はみられず、もっぱらクライエントの目を通してクライエントを温かく理解することが力説されている。また、本章のp.29に、後の共感の定義となる“internal frame of reference”が、このような態度を表す新しい試みとして紹介されている。“Frame of reference”は“point of view”と同じように、一般的には頻繁に利用されている言い回しであり、これが日本では「内部的準拠枠」と直訳されることになったが、一般的な語用を考えると「内側から（理解する)」と意訳すべきではなかったかと筆者らは考えている。

このようなことをロジャーズは“attitude”（直訳は「態度」）としているが、筆者らには、ここでロジャーズが提示しているものを今日的に表現すると、ロジャーズのセラピーにおける「あり方」を示したもののように読める。つまり、これは、今日において話題となっている“Presence”であり、本章を通してロジャーズは、「自分たちはこのような＜あり方＞でクライエントと接している、そうしているとクライエントにいろいろな治療的変化が現れてきた」と主張しているように思えてならない。Attitudeというと、ある「望ましい態度」とか後の「促進条件」、「３つの態度」が強く連想されるが、ロジャーズの記述からはそのような「態度論」よりも、いっしょにいる＜あり方＞が強調されているように思えてならない。

このように、本章にはクライエントの体験報告を基盤に後に提唱される「無条件の肯定的関心」と「共感的理解」への注目が見られるが、反対に筆者らから見ると、重要な見落とし、あ

るいは考察不足もあるようにも思われた。すなわち、上記に示したように、ロジャーズが本章ではテクニックよりも「あり方」を強調し、テクニックについて過剰に強調しないようにしていたために発生した見落としがあるように思えるのである。それは次のようなことである。ロジャーズは概念化の基盤としたクライエントの体験報告の中で、2人のクライエントが共通して「リフレクション」が有効であったと明言しているのに、このことは考察には採り入れられず、態度が重要であったかのように論じている。

P. 37のクライエントは：

"I was never conscious that he was reflecting or re-stating things....but he would clear them up for me, bring me back to earth..."

としているし、p. 39のクライエントは：

"..the counselor's reflection of feeling with complete acceptance let me see the attitude with some objectivity..."

としている。

いずれの場合にもクライエントははっきりと面接の効果にリフレクションをあげているにもかかわらず、リフレクションの効果については本章では考察されていない。勿論、本章の冒頭に「テクニックは強調しない」としているためであろうが、リフレクションの効果が「態度」(「あり方」) による効果とすり替えられてはいないだろうかと筆者らは危惧するところであり、これが後に大きな誤解に発展するのではないだろうかとさえ心配するところである。

当然、リフレクション自体の効果についてはGendlin, E.(1964) の体験過程理論による説明を待つことになるが、ここでロジャーズが見落としていた効果について後にジェンドリンが研究していったのではないかと考えることも可能であろう。同様に、本章のp. 49には、いろいろなクライエントに共通して見られる "vital and releasing experience" (活力ある解放的な体験) についての記述があるが、これも後にジェンドリンが考察する「フェルトシフト」ではないかと思われる。このことは、ジェンドリンとロジャーズの関係を考える上で参考になる。おそらく、ジェンドリンとロジャーズは同じ現象 (リフレクションによる体験過程の促進、フェルトシフト等) を観察したが、それらを理論化する過程で取り上げる点や説明概念が違ってきたのではないかと本章の記述から考えられるのである。

3．クライエントが体験している治療的関係（第3章）

本章を読むにあたって注目しておきたい用語：

「治療の段階」「体験している」「リフレクション」

第3章 (「クライエントが体験している治療関係」) でも、ロジャーズはクライエントの体験報告を提出し、治療関係についての「現象学的」な探求を行っている。治療関係はカウンセラーの人格、技術、態度をクライエントがいかに体験するかに依存することを前提とし、クライエントの目を通して治療の段階が考察されている点に注目すべきであろう。日常の臨床においても、私たちは頻繁に「導入期」とか「終結期」といった表現を用いるが、実際にこれらは、

クライエントによってどのように体験されているのであろうか？心理療法には、一般的に、そのような「段階」があるのだろうか？このような課題をロジャーズは明らかにしようとしているのである。

ところで、ここでクライエントの「体験」と日本語で書いているが、原文では「体験している」(Experiencing) という言葉が用いられていることにも注目しておきたい。この言葉はジェンドリンの理論に頻繁に登場するものであり、村瀬がこれを「体験過程」と訳したことはよく知られている。また、ジェンドリンの理論を "A Theory of Experiencing"（「体験過程理論」）と呼ぶこともあるが、実際にはジェンドリン以前にカール・ロジャーズが用いていた言葉なのである。このことからして、ジェンドリンの理論のルーツがロジャーズにあったことは明白である。ジェンドリン自身の記述（Gendlin1964）からの推測だが、哲学者ジェンドリンは、ロジャーズが平易に用いていた「体験している」(experiencing) ということを追求し「体験している、ということの心理学」を明らかにしようとしたのであろう。それがジェンドリンの「体験過程理論」の原点であるように思われる。

もう一つ注目しておきたいのは「リフレクション」（伝え返し）である。現在 "reflection of feelings" として知られているリフレクションは、本書で "reflection of attitudes"（認知の伝え返し）として登場している。あるクライエントは：

> "During the interviews my psychologist took my views & thoughts and made them so that I could understand what was going on. He didn't conclude them but stated them back to me so I could draw my own conclusions"（P. 70）

と書面でセラピーを振り返っている。クライエント中心療法特有のこの方法では、カウンセラーが思考や見解を結論づけずに伝え返すことによって「クライエントが自分自身で結論を引き出せるようになる」方法として体験される。つまり、リフレクションはクライエントがいかに問題を認知しているかを伝え返すもので、クライエントが自らの力で変化していくことを促すものであるといえる。翻訳では "reflection of attitudes" が「態度の反射」と訳されているが、"client's views & thoughts" を伝え返すこの方法は「認知の伝え返し」と訳す方が誤解が少ないように思われる。ここでも、クライエントの記述では、リフレクションは「受容を伝達するため」ではなく、自らの問題の認識を客観的に眺めるために役立っているのである。

クライエントの目から見たセラピー過程

セラピー過程を通して、クライエントがどのように治療関係を体験するかが、6つの段階をおって紐解かれている。本書発表後、自己、自己概念、体験、自己一致などの概念的整理がなされ、1959年に再びセラピー過程について、12段階に分ける試みがなされ、より具体的な解説がされた。そこで、この第3章は1959年論文（Rogers 1959）の先駆けとなる論文として注目される。ここでは1959年論文と対応させながら、クライエントの体験段階の整理を試みる。

1．責任の体験（*The Experiencing of Responsibility*）

面接の始めにカウンセラーとの関係において、クライエントの多くは「自ら責任をとること

ができる」ということを見出す。その体験をあるクライエントは次のように述べていた。

"But I soon discovered that by talking of my indecision and problem I was able to see clearly that my problem was being solved of my own initiative rather than the counseling of my interviewer." (P. 71)

⇒1959年論文

1959年論文では責任についてさらに詳細な記述が展開される。「①クライエントは言葉および行動によって自由に自分の感情を表現するようになり②その感情が次第に自己でないものよりも自己に言及したものとなり③体験が正確に象徴化（内面的でなく外在的になる）されるようになる」と論じられた。このように1959年論文では、治療関係のプロセスがより注目されている。クライエントが「感情に触れるようになること」や「体験が象徴化されるようになる」など、これらはのちのジェンドリンの体験過程理論の構築によってより明確化されるところであろう。

いずれにしても、どちらの記述を見ても興味深いことは、この段階ではクライエントは自分の問題は、カウンセラーの援助を受けながらも自分で解決するのだ、という責任を感じる段階であるという観察である。カウンセラーへの依存や治療者への転移感情が強まったり、その中で退行的になっていく、というよりも、クライエント中心療法での観察は、クライエントは最初の段階からより自立していくように動いているという点には注目しておきたい。

2．探索の体験（*The Experiencing of Exploration*）

探索の段階とは："I remember that I felt drawn down into myself, into places I didn't want to go, hadn't quite been to before, and yet had to see" (P. 72) というクライエントの報告にあるように、これまで目を向けていなかったり、避けていた体験を探索していく段階である。この段階を決定付けるファクターの一つとして「自己の中にある矛盾した体験」があげられている。これは後にくる「自己の再体制化」の前提条件といえよう。また、「自己の中にある矛盾した体験」がカウンセラーとの関係の安全性（the safety of the relationship）の基に許容され、以前は気づかなかった矛盾が発見されることとなる。次の引用にあるように、ロジャーズはこの段階を重要なものと考えていたようである。

"One explanation of therapy is that the inconsistencies in self are recognized, faced, re-examined, and the self is altered in ways which bring about consistency" (p74)

⇒1959年論文

1959年の論文では「④表現される感情が、次第に自分の体験の中にあるものと、自己概念との間の不一致に言及したものになる」という記述に見られるように、「自己の中にある矛盾した体験」が「体験と自己概念との不一致」と言い換えられることとなった。これらはロジャーズの治療論の発展に伴って、「自己概念」や「不一致」などが概念化されてきたことによるものであろう。

3．否認されていた認知の発見（*The Discovery of Denied Attitudes*）

"The statement of hating my father still is—is something that I wouldn't have agreed to last year...I felt that I had got rid of it, it hadn't—it wasn't on the surface at least."（p76）

これは、あるクライエントが父親について過去に認識されていなかったことが現在は受容できないまでも認識できるようになった例である。ここで特筆すべきことは、この段階の見出しである。まず、"attitudes" という言葉が認知を意味するように使われており、日本語でいう「態度」とは異なった用法で用いられていることである。上記にも触れたが、ロジャーズはカウンセラーの「態度論」を明確化したことで日本ではよく知られているが、実際には「認知」と訳した方が適切ではないかと考えられる。また、「否認」という用語が用いられていることは、この時代のロジャーズが無意識的な「抑圧」を暗黙のうちに了解していたことを意味している。「フロイト同様にロジャーズも、意識から否認されている情動体験は本人がそれに気づいていようと気づいていまいと、形として存在していることなり、治療関係の作用によってそれらが明るみに出たと考えられていた」（池見2001）のである。しかし、このあと、ロジャーズは、上記でも引用した次の重要な観察を行っている。

"This experience of discovering within oneself present attitudes and emotions which have been *viscerally and physiologically experienced*, but which have never been recognized in consciousness, constitutes one of the deepest and most significant phenomena of therapy.（p. 76）＜強調は著者らによる＞"

この記述から推測するに、ロジャーズは無意識的に抑圧されたものへの接近は「からだに感じられるもの」（viscerally and physiologically experienced：感覚的に生理的に体験されるもの）に触れることであることを観察していた。後にジェンドリンがこれを「フェルトセンス」と呼び、それへの触れ方を明確化して「フォーカシング」を生み出していくのである。この意味でもジェンドリンはロジャーズの観察を発展させていったわけであるが、理論的には、ロジャーズの時代とは異なり、からだで感じられるものは「抑圧されている」のではなく、意味として「未形成」なのであるとジェンドリンは主張するようになる。

⇒1959年論文

1959年論文では、「⑤クライエントは、不一致から来る脅威に気づいていく経験をするようになり、⑥過去において気づくことを否定されたり、歪められて気づいていた感情を、気づきの中で十分経験するようになる。」⑤の段階で「クライエントが脅威を経験できるのは、セラピストがいつも変わらずに無条件の肯定的配慮を示すことによってのみ可能となる。」との説明が加えられている。すなわち、1959年では「否認」という構造概念と「無条件の肯定的配慮」といった治療概念が関連して論じられるようになるのである。しかし、どちらの論文においても、ロジャーズが「抑圧モデル」を用いて思考していたことは明らかである。

4．自己の再体制化（*The Experiencing of Reorganizing the Self*）

"It is worth observing that reorganization of the self means a new perception of everything,

including experiences formerly deemed satisfying." (p. 128)

「否認された」内容と直面したあと、全体の構造が変化する、すなわち「自己」という構造が大幅に変化するのである。この記述に見られるように、ロジャーズは（フロイトとともに）人格を建物のような「構造」と理解している。基礎の部分に変更を加えれば、構造全体が変化せざるをえないのである。さらに、クライエント Miss Har との面接過程において次のことが観察されている。

As she struggles to find her true feelings for her father, the ones which *match her sensory experience*（強調は筆者らによる）, she uses the interview as a tryout ground." (p. 83).

クライエント自身も次のような体験を語っている。

I was trying to get myself to say something and then to see if it was true, or if I'd know if it were true after I said it..." (p. 83)

これは後にジェンドリンが発展させる体験過程理論における reference（照合）の現象ではないかと推察される。つまり、ロジャーズのいう自己再体制化の過程には、reference の現象がすでに包含されていたと考えられる。ロジャーズは自己の再体制化とは古い自己（old self）から新しい自己の体制への変化と説明しているが、それではまるで自己という構造があり、それを形成するパズルのようなピースがあり、その組換えが起こることが再体制化であるかのように連想される。ロジャーズは理論のうえでは、このような発想をするほかなかったのかもしれない。しかし観察事実では、ロジャーズが再体制化の現象として観察しているのは、感覚している体験に言葉や概念が適切に象徴化しているかを確かめる reference の現象であったと考えられる。ロジャーズの概念では古い自己が新しい自己ととって代わるような印象を受けるが、ロジャーズが観察をしながらも概念化できていなかったのは、一つ一つの体験の一端と概念が照合されることによって、認識が変化していくという体験過程なのである。ここでもまた、ジェンドリンはロジャーズのやり残していた理論化を進めたと考えられるのである。

⇒1959年論文

1959年論文では、次のような記述が見られる。「⑦クライエントの自己概念は、以前には気づくことを否定されてきたり、歪められていた体験を同化し、包み入れながら再体制化される。⑧このような自己概念の再体制化が続いていくと、クライエントの自己概念は、ますます自分の体験と一致するようになる。すなわち、自己は以前にはあまりにも脅威であるために気付くことができなかった体験を今は包みいれるようになる。」ここでは、再体制化が「自己概念」と「体験」の「一致」といった「自己一致」概念によって説明されているが、ここでも体験と概念が照合されていく過程ではなく、大きくくくった「自己」や「体験」といったものが、あたかも二つの円のように一致する度合いについて論じられており、理論的にはシンプルな構造モデルが採用されている。

5．進歩の体験（*The Experiencing of Progress*）

これまでの過程で否認されていた体験は受容され、再構成化の過程をたどって、クライエン

トに進歩（progress）と達成（achievement）の感覚をもたらす。治療が進むに連れ、クライエントは進歩している感覚や達成感を感じるようになる、というのがロジャーズの観察である。

⇒1959年論文

「⑨クライエントは、脅威を感ずることなしに、セラピストの示す無条件の肯定的配慮をますます体験することができるようになり、⑩ますます無条件の肯定的自己配慮も感じるようになる。そして⑪自分自身を評価の主体として体験するようになる」と提示されるように、本当の自己になっていくということは脅威ではなく、肯定的な自己配慮感を体験することであることが観察されている。

どちらの記述でも、「進歩している感じ」「達成感」といった肯定的な感覚が伴うという記述は興味深い。一般的なイメージとしては、心理療法が進むにつれて、より深く抑圧されたものに「直面」したり、「徹底操作」をしていくといった、苦痛を連想させるものがあるが、これらはロジャーズの観察とは一致しない。

5．終結の体験（*The Experiencing of Ending*）

クライエント中心療法の終結の特質をロジャーズは以下のように結論付けている。

> "A final characteristic is the very interesting fact that client-centered therapy, with the intense focusing upon self which it involves, has as its end result, not more self consciousness, but less. One might say that there is less self-consciousness and more self."（p. 177）

終結の体験では、自己に対するこだわりや自意識が減少していく、その分、自分らしくなっている、という観察は神経症のクライエントに接してきた大方の臨床家の共通した観察ではないだろうか。不安（神経症的不安）が減少するに連れ、自意識は減少し、自分へのこだわりも減っているが、気がついてみると自分らしく生きている。このことは1959年の論文ではさらに理論的に発展されている。

⇒1959年論文

「⑫クライエントは、体験に対して、自分の（思い込んでいる）価値条件にもとづいて反応することが少なくなり、より一層、自然な（生命体的な）価値付けの過程に基づいて反応するようになる。」1959年になると、いろいろな拘束から来る価値ではなく、生命体として自然な価値づくりの過程が発動してくることが観察されるのである。故に、人は「～であらねばならない」、「～しなければならない」と思い込み、そこを価値と思い込むのではなく、自然体として「～したい」ということが価値あるものであることがわかり、自分の生命体にも信頼をおくようになるのである。

治療過程についての記述により得られるいくつかの示唆

上記のように、ロジャーズの観察した治療過程を検討してみることによって、次のようなことが示唆されよう。第一に、クライエント中心療法とは、どのような経過を辿るのかがこの章

によって描かれている点に注目しなければならない。治療はどのように進んでいき、どのように終わるのかといった全体の経過が描かれているところはクライエント中心療法の実践家にとってはモデルとなるだろう。第二に、この記述は理論的に演繹されたものではなく、実際のクライエントの体験を記述したものであることに意味があり、妥当性があると言えよう。第三に、治療の初期にしろ、終結期にしろ、これまで一般的とされていた精神分析的理解とは大きく異なっている点が注目される。第四に、ロジャーズの考え方の基本はこの時点（1951年）においてかなり完成していたことがわかる。1957年や1959年の論文（Rogers1957, 1959）では多少の詳細化がなされているものの、考え方の基盤はすでにできていたと見ることができよう。最後に、この治療関係のプロセスの提示に見られるいくつかの点について、後のジェンドリンの体験過程理論との強い関連性が見られる点にも注目しておきたい。

4．心理療法の過程（第4章）

1．心理療法における変化の過程をどう見るのか

ロジャーズは本書の第4章、「サイコセラピーのプロセス」において、セラピーが成功するときに何が起こっているのか、その特徴を他の研究者の研究などを交えて提示している。

見出しを順に追っていくと、まず“Characteristic Change or Movement in Therapy”として、「素材の種類」があげられている。セラピーが成功する時、クライエントが話題にするものは症状や周囲の人々、または環境についてであるが、徐々に自分の気持ちや自分自身についての話題に変化する。また、過去の話から現在の話へと時制軸の変化もみられる。つまり“me, here and now”の話題へと内容が変化するのである。徐々に過去に退行し、過去の出来事が話題となっていくことを示した精神分析とは対照的に、ロジャーズは後のヒューマニスティック心理学のキーワードの一つとなる、“here and now”での体験が見られるようになることを観察している。なお、この節で興味深いのは、この記述は後にジェンドリン等が作成した「体験過程尺度」（Klein, M., Kiesler, D., Mathieu, P. 1970, 池見他1984）と共通するような観察が多い点である。体験過程尺度のルーツはここにあったことは記述から明らかであろう。

次に“Change in Perception of and Attitude toward Self”が挙げられている。ここでは自己についての知覚や認知の変化が観察されている。これまでにくり返し指摘しているように、ここでもロジャーズが使っている“attitudes”は「認知」または「認識」と訳す方が適切であろう。また、上記の第3章の検討にもあったように、ロジャーズは自己を構成物のように想定していたことが読み取れるが、ロジャーズは人が「真の自己」を求めてそれに向かっていくとし、それを援助するのがセラピーであると位置づけている。これは後にロジャーズが人には「自己実現傾向」があるとする、その概念と繋がってくる考え方であると捉えられる。しかし、このころのロジャーズにとって「真の自己」とは何なのか、といった記述が十分になされているとは言えない。また、本章に紹介されている様々な研究者からの自己についての研究やコメントにおいても、それぞれの自己に対する概念は必ずしも一致していない。例えば、「自分自身をより独立しているように、しかもより一層うまく人生の諸問題を処理できるものとして知覚す

る」(p. 139) という自己の定義は、自己を構造として捉えたものではなく、むしろ、体験の様式として捉えていると思われ、最近になって吉良 (1999) が論じている「主体感覚」の記述に近いものがある。

3つめの見出しは "Change in the Manner of Perception" である。ここでは成功するセラピーにおいてクライエントの話の内容が一般論から自分自身の体験や自分に根差したものへと変化することが示されている。また、ここでは次のような興味深い記述がみられる。

> "The human being deals with much of his experience by means of the symbols attached to it. These symbols enable him to manipulate elements of his experience in relation to one another, to project himself into new situations, to make many predictions about his phenomenal world. In therapy, one of the changes which occurs is that faulty and generalized symbols are replaced by more adequate and accurate and differentiated symbols." (p. 144－145)

まるでジェンドリンが書いたかのようなこの記述は確かにロジャーズ自身によるものである。[1960年代のロジャーズの文献には「ジェンドリンから拝借した」とロジャーズが認めているところ (Rogers 1961) があるが、この時点ではジェンドリンは本格的にロジャーズの研究には参画していないと思われる。] すなわち、これは、後にジェンドリンが考察するように、体験と象徴の関係を取り上げたもので、体験に照合しながら概念化、象徴化していく中で体験の性質が変化していく、というジェンドリンの体験過程理論を予感させる記述なのである。ここでも、再びロジャーズとジェンドリンの密接な関係が浮かび上がってくるのである。

第4の見出しである "Movement toward Awareness of Denied Experience" では、否認された体験を発見するためには適切な象徴化が必要という考えを述べている。

第5の見出しは "Characteristic Movement in the Valuing Process" で、外部から自分を価値づけるのではなく、自ら価値を作っていくようになる過程が記述されている。

次の "Characteristic Development in the Relationship" では、この価値化の過程を踏まえ、セラピストとクライエント2人の自由な関係についての記述がなされている。この自由な関係は、情動的にぴったりした気持ちを2人の関係の中で創造することであると説明されている。つまり、お互いがそのままでいられる場を主張していると思われる。これは、後にロジャーズ自身が中心的に位置付けてくる "Genuineness" の概念やエンカウンター・グループの基盤になるものとも思われる。

最後の "Characteristic Changes in Personality Structure and Organization" では主に研究結果や心理検査 (MMPI、ロールシャッハ) などを基にしたパーソナリティ変化についての Outcome Studies の結果が提示されている。

心理療法の過程から得られる示唆

この章の結びとして、ロジャーズは上記のような成功するセラピーに共通して観察される変化を基に、あるまとまった理論を提示している。ここでの「あるまとまった理論」とは "A Co-

herent Theory...”の筆者らの訳であるが、日本語の「ロジャーズ全集」での翻訳は「密着した理論」となっているので注意しなければならない。「密着した理論」とはどこから来たのか分らない、了解困難な言葉だが、英語の“cohere”を“adhere”と勘違いしたとしか思えない誤訳である。ロジャーズ全集の翻訳にいろいろな問題があることはすでに指摘されているが、これもその一例である。このような誤訳等によって、読者が受ける印象が原文と日本語では異なっていないか、気になるところである。

さて、この理論的なまとめでは、自己は構造として捉えられているが、その構造は「安全で受容的な環境の中で弛む」とされ、後に「無条件の肯定的関心」という概念に発展する基盤がすでに見られている。

> “In this atmosphere of safety, protection, and acceptance, the firm boundaries of self-organization relax. There is no longer the firm, tight gestalt which is characteristic of every organization under threat, but a looser, more uncertain configuration.”（p193）

さらに、より弛んで断定的ではない自己のコンフィグ（“looser, more uncertain configuration”）では種々の体験の様式の変化が見られることが示されている。

> “As the process continues, a new or revised configuration of self is being constructed. It contains perceptions which were previously denied. It involves *more accurate symbolization of a much wider range of sensory and visceral experience*. It involves a reorganization of values, with the organism's own experience clearly recognized as providing the evidence for the valuations.”（p193）［強調は筆者らによる］

このような状態での体験の様式では「からだで感じられる」（「感覚的・内臓的経験」）ようになっていることや、それに対してより「正確な象徴化」がなされることが示されている。まさに、これは後にジェンドリンのフォーカシングが主張することであり、このことをロジャーズが先に観察していたことや、いかに忠実にジェンドリンがロジャーズの観察を取り入れ発展させたかがよくわかるところである。

しかし、他方でロジャーズとジェンドリンの後の違いにも通じる混乱の根源をここに見ることもできると筆者らは考えている。そして、その混乱は後の著作にまで付きまとってくる問題なのである。それは、「自己」を「構造」と捉えるべきなのか、「様式」と捉えるべきなのか、といったモデルがロジャーズの中でも定まっていないという点である。約10年後に出版され、大きな話題をよんだ著作 *On Becoming a Person*（Rogers 1961）では、このモデルの混乱がいたるところに露呈していると筆者らは読んでいる。一方では自己を構造ととらえ、“self-structure”といった用語でそれを表現しておきながら、もう一方では、“experiencing”, “manner of perception”, “manner of behavior”などジェンドリンと共通するような構造的ではない用語が入り乱れている。すなわち、知覚の様式や行動の様式、認知の様式などといった自他との関わりの様式そのものが自己なのか、あるいは、それらは現れで、本当の自己はそれらの様式の背後に隠れている構造なのか。本章のロジャーズの記述ではこの両方のパラダイムが混在しているようにも見受けられる。

さて、ロジャーズは次のような興味深い示唆を得て本章を閉じている。

"Underlying this entire process of functioning and of change are the forward-moving forces of life itself." (p. 194)

これは正しく、後に「自己実現傾向」と呼ばれるようになる動きである。「人生を前に動かす力」とは精神分析理論とは異なるロジャーズのヒューマニズムの根底にあるものと思われる。(事実、ロジャーズはオットー・ランク派の精神分析の教育を受け、本書の記述にも多くの精神分析用語が登場するが、この下りは精神分析の基本とされるフロイトの本能論からは大きく離れた考察である。) また、興味深いことに、ジェンドリンの最近の著書 (Gendlin 1996) の第20章の題目が "A Life-Forward Direction" (「生命を前に進める方向性」) で、同じ言葉が使われているところに注目しなければならない。ある意味で、ジェンドリンはロジャーズの足跡を忠実に追っていると考えることもできよう。

5. 他の学派により生じる3つの疑問：転移・診断・適用可能性（第5章）

3つの節によって成り立っているこの章では、「転移」「診断」「適用可能性」について、クライエント中心療法の立場からの見解が示されている。いわば、他の学派からクライエント中心療法を見た時に生じる、一般的な質問に対する解答であるといえよう。

まず、転移についての注目すべき点は、「深い転移関係のない治療が可能である」とされていることである。転移の態度は、多くのクライエントに存在しているが、クライエント中心療法においては、これらの態度が転移関係へと発展することは少ないとし、その理由を、セラピストは世間一般の人間関係における自己を完全に払いのけており、投影の基礎となるものがないからである、としている。つまり、クライエントはセラピストに理解され、受容されるという体験以外は何も体験していないため、転移は自分に内在したものである、ということに気づかざるを得ないのである。そして、このような転移関係のない治療のために、セラピストはクライエントの別の自己となるように人格を除去された、「無人格 (impersonal)」でなければならない、とした。これは一見、セラピストの存在 (presence) そのものを消してしまうことを示しているかのように受け取れるばかりか、後に提示される「自己一致」の概念と矛盾するかのようにも受け取れる。しかし、ここでいう「無人格」とは、セラピストがクライエントの投影の対象とならない、ということを強調するあまり、大袈裟な表現となってしまった印象がある。ここでロジャーズが伝えたかったことはむしろ、クライエントの思考過程の邪魔とならない、異物感をクライエントが感じることのない状態の治療的側面についてであろう。すなわち、クライエントの思考過程に寄り添い、それを促進し、無駄な質問や意見や解釈による評価や対立を作り出さない状態を生み出す治療関係では、転移的関係の困難に陥ることが少ない、という主張があるように思える。

次に、診断についてであるが、クライエント中心療法におけるセラピストの目的は、クライエントが不適応の心因等について、自分自身で診断し、体験し、受容することが出来るような条件を整えることであるとし、心理学的な診断がもたらす問題点を2つ述べている。1つ目は、

診断をすることでクライエントの依存的傾向が増大されてしまうことであり、2つ目は、少数の専門家によって、多数が社会的に統制される方向に発展してしまう、ということである。1つ目はともかくとして、2つ目の理由には、「少数の人」つまり権威ある人が大衆を操ろうとすることは民主主義に反する、といった、実にアメリカ的な民主主義の背景が見え隠れしているといえる。このような点は第2章と同じく、ロジャーズのカウンセリング論の背景にあるアメリカ的民主主義の色彩が強く感じられるところである。

最後に、クライエント中心療法の適用可能性については、きわめて広く、あらゆる人々に適用出来る、とおおざっぱに述べるに留まっている。

この章で述べられていることは、ロジャーズの1957年論文、"The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change"（Rogers 1957）の中で述べられている、"Significant Omissions"（省略された重要なこと）につながっていくものである。1957年論文の中では、主に診断や適用可能性について述べられており、この章以上にはっきりと、「心理療法は特殊な種類の人間関係であり、日常生活に起こってくる他のすべての人間関係と違った種類のものであるということも述べられていない」「セラピストには、特殊な専門的な知識－心理学的、精神医学的、医学的、または宗教的な－が要求される、ということも述べられていない」「セラピストがクライエントについて、正確な心理的診断をすることが心理療法には必要である、ということも述べられていない」と言及している。ロジャーズは、診断が心理療法にとって必須のものではなく、セラピストとクライエントの関係こそが、心理療法には必要である、と主張しているとともに、このような関係は、心理療法に限って起こるものではなく、日常の場面でも起こりうる、と主張しているのである。

ただし、以上のことを、ロジャーズはケースを紹介しながら示しているが、それらはいわば、「上手くいったケース」であり、「いいとこ取り」でもある。これらのやり方で上手くいっていないケースはどうだったのか、を検討しない限り、他の学派からの質問に対する完全な解答にはなり得ないのではないだろうか。

6．人格と行動の一理論

人格と行動の一理論について

「人格と行動の一理論」はこの時代のロジャーズの文献の中でもとりわけ注目されてきた論文である。この論文は著作 *Client-Centered Therapy* の第11章（終章）に提示されており、本書の要の役割を果たしている。著作 *Client-Centered Therapy* におけるこれまでの主張は主にクライエントの体験の観察から得られたものであった。これを一つの「理論」にまとめることを目的としたものが「人格と行動の一理論」であり、それまでバラバラだった観察事実を理論的に公式化したものである。この理論では、「命題」という形で、一つ一つの主張がなされており、19個の命題が提示されている。ロジャーズ自身が述べているように、これらの命題には矛盾している点や再考すべき点も見受けられるが、ここに提示されている命題はロジャーズのパーソナリティ論の基礎となるものである。

なお、冒頭で示したように、本論は主にロジャーズ自身が執筆した心理療法関係の論文を取り扱っているために、第６章から第10章までは検討範囲から除外している。

体験と自己の概念化

本章において、ロジャーズはパーソナリティの変化に焦点をおき、self-structure（自己構造）と experience（体験）が一致していくことを彼のパーソナリティ論の核においている。なお、本論では experience を「体験」と訳している。日本語の「経験」という言葉は過去からの蓄積を意味する場合もあり（「例えば、「臨床経験20年」）、ロジャーズが意図している今ここでの気持ちや意識作用については、「体験」の方が適切であると考えるからである。また、experiencing という進行形の場合は、ジェンドリンがそれを利用する場合は、村瀬の翻訳以来「体験過程」と訳しており、ロジャーズが同じ用語を使う場合には違う日本語を当てるのも誤解を招くので、本論では統一して experience を「体験」と訳している。

この理論において、ロジャーズはパーソナリティ構造の１つの構成概念として“experience”という概念を提示している。この“experience”は感覚的・体感的な体験の場であり、すべての感覚様式を通して体験されるすべてをあらわしていると仮説されている。この「experience」概念について、ロジャーズは命題１において“...in a continually changing world of experience...”としており、体験の場は常に変化するものであるとしている。しかしながら、本章の後半に示されている図式化されたパーソナリティ構造では、“world of experience”は円で示され、固定化されたもののように理論化されている。ここでも、先に指摘したロジャーズの発想様式の混乱が見られる。すなわち、ロジャーズの中では「自己」や「体験」が特定の構造をもったコンテントであるかのように理論的には捉えられていたり、様式や過程のようにも捉えられ、定まらない点である。

パーソナリティ構造のもう一つの構成概念として、自己構造（self-structure）という概念が提示されている。この自己構造は体験とは異なる性質のものであり、それは現在までの価値体系であり、人工的で他者投影的で固定化されたものであると提唱されている。この固定化された価値体系を流動的な体験過程に基づいた価値付けの過程へと変化させ、連続的に価値を見いだしていく生命体のプロセスを獲得することがパーソナリティの理想として仮説されているのである。「自己」「自己構造」「体験」「価値」などの概念は必ずしも完成されているとはいえないものの、この基本的な考え方はロジャーズが生涯もっていたものではないだろうか。また、異なった理論を後に提唱したジェンドリンにおいても、この基本的な方向性は継承されていると考えることができるだろう。

パーソナリティ変化とセラピストのあり方

「人格と行動の一理論」ではパーソナリティとその変化が取り扱われており、セラピストのあり方については、とくに命題を立てて検討されてはいない。しかしながら、ロジャーズがパーソナリティ変化におけるセラピストのあり方を論じた1957年の論文（Rogers 1957）よりも６年前に発表されたこの論文でも、ロジャーズがすでにクライエントのパーソナリティ変化に

はセラピストのあり方が重要であると考えていたことは確かである。

命題7では“The best vantage point for understanding behavior is from the internal frame of reference of individual himself”としており、後に empathy（「共感的理解」）と表現されるようになったあり方の重要性を指摘している。なお、先にも述べた通り、“internal frame of reference”は「内部的準拠枠」と訳されてきたが、本論では平易に「内側から理解する」と了解することにする。

次に、命題17では“Under certain conditions, involving primarily complete absence of any threat to the self-structure...”とあり、クライエントの自己構造の再体制化や自己受容において、セラピスト（他者）との安全な環境が必要であると仮説されている。この「自己構造に対して全く脅威のない状況」とは、後に「無条件の肯定的配慮」や「受容」という関係概念に発展する。

このように、本論文におけるパーソナリティ論では3つの鍵概念があると言えよう。それらは「体験」「自己」と「他者」である。これらはロジャーズが生涯を通して書き残した著作や論文を理解していくにあたっての共通の基盤となっているものと筆者らは考えている。

7．総合考察

本論では各章と対応する各セクションにおいて、それらの章から得られた示唆を解説しているので、とくに長い考察は必要ではない。「まとめ」の意味で各章から得られた考察を以下に紹介しておきたい。

まず、本書 *Client-Centered Therapy* の文化的背景及び歴史的意義に注目しなければならないだろう。人権運動が盛んになる以前に書かれた本書では、種々の悩みをもつクライエントを内側から暖かく理解することや、クライエントのもつ生命の前向きの動きを信頼することに重点がおかれている。ここに見られる「個の尊重」の考え方はアメリカ的民主主義の背景をもつものであり、またおそらくカール・ロジャーズのキリスト教精神の現れでもあるだろう。

このように、治療者の「あり方」やクライエント理解の視点を強調するあまり、本書で示されている臨床的事象に対しては、必ずしも考察が十分であるとは言い切れない点がある。しかし、本書ではそれだけ豊富な臨床的観察がなされ、本書で示された理論だけでは対応できないほど多くの観察がなされているとも言えよう。

このような観察の中でも、「からだで感じられる感覚」に焦点を当てていくことの臨床的意義や、そのような中で「独特の解放感」が起こる、という観察は今でいう「フォーカシング」であり、ロジャーズが1951年にすでに観察していた現象をより具体的に、技術的に考察し、発展させていったのがユージン・ジェンドリンである。今となっては、「からだに感じられるフェルトセンス」と言えば誰もがジェンドリンのフォーカシングを連想するだろうが、それよりも前にロジャーズが同じことを観察し、記述していたことには筆者らも驚かされた。

また、リフレクションについても、それがどのように効果的なのかを明確にしたのはジェンドリンである。さらに、ロジャーズは体験していること（「体験過程」）を正確に象徴化し、そ

こから価値を見い出すことを人格の成長と考えたが、この「体験と象徴の関係」こそがジェンドリンの体験過程理論が真っ向から取り組んだ課題なのである。このように考えると、ジェンドリンは正しくロジャーズの仕事を継承していることが見えてくる。もちろん、ジェンドリンはロジャーズとは異なった理論化を行っているが、取り扱っている臨床的事象を考えると、フォーカシングがクライエント中心療法の発展であることに間違いはないことが本書から考察できる。

最後に、ロジャーズの観察した事象や説明概念の中には「過程」を重んじるものが多数見受けられる。"Process of...", "Manner of ..." "Experiencing" などの用語の使用を見ても、過程的に発想しようとしていたことが読み取れる。しかし、いざ理論を考えるとなると、"self-stucture" など構造的に考察している。人をいつも移りかわっている過程的存在と捉えるのか、人はある特定の構造をもった存在と考えるか、ロジャーズの中で、いわゆる "content paradigm" と "process paradigm" (Gendlin1964) が混在しているように思えるのである。それらのうち、表面的に理論化されていくのは構造的なモデルであるが、それでは言い表わすことが難しいプロセス的な側面についてもロジャーズは感じ取っていたのではないだろうか。ロジャーズにおけるプロセス的思考と内容的思考の対立はこの後の著作にも続くことになるのである。

引用文献

近田輝行 (2001)：シリーズ「心理臨床セミナー6」「体験過程とカウンセリング」、垣内出版。

Farer, B., Brink, D., & Raskin, P.(1996)：*The Psychotherapy of Carl Rogers*. New York, Guilford Press.

Gendlin, E. T.(1964)：A Theory of Personality Change. In Worchel, P. and Brynne, D.(Eds.) Personality Change. New York, John Wiley & Sons. ジェンドリン、E.、池見　陽著、池見　陽、村瀬孝雄訳 (1999)「セラピープロセスの小さな一歩」金剛出版。

Gendlin, E.T.(1981)：*Focusing*. New York, Bantam Books.

Gendlin, E.T.(1996)：*Focusing-Oriented Psychotherapy*. New York, Guilford Press. 村瀬孝雄、池見　陽、日笠摩子監訳、(1999／2000)「フォーカシング指向心理療法（上下巻)」金剛出版。

保坂　享 (1988)：「クライエント中心療法の再検討」心理臨床学研究 6 (1)：42−51.

池見　陽 (2001)：「心理療法試論：治療関係と気持ちの過程をめぐって」神戸女学院大学大学院人間科学研究科心理相談室紀要心理相談研究　2：3−12.

池見　陽他 (1984)：「体験過程とその評定：EXP スケール評定マニュアル作成の試み」人間性心理学研究　4：50−64.

吉良安之 (1999)「カウンセリングにおける『主体感覚』の概念の提示とその賦活化の研究」九州大学博士論文

Klein, M., Mathieu, P., Kiesler, D.(1970)：*The Experiencing Scale: A Research and Training Manual*. Madison, Wisconsin Psychiatric Institute.

久能　徹、末武康弘、保坂　享、諸富祥彦 (1997)：「ロジャーズを読む」岩崎学術出版社。

村瀬孝雄編 (1997)：ロジャーズ：クライエント中心療法の現在「こころの科学」74号。

Rogers, C.(1951)：*Client-Centered Therapy*. Boston, Houghton-Mifflin.

Rogers, C.(1957)：The Necessary and Sufficient Conditions for Therapeutic Personality Change, *J. Consult. Psy*. 21, 95−103.

Rogers, C.(1959)：A Theory Of Therapy, Personality, and Interpersonal Relationships, as Developed in the

Client-Centered Framework. In Koch. S.(Ed.), Psychology: A Study of Science, III, New York, McGraw-Hill.
Rogers, C.(1961)：*On Becoming a Person*. Boston, Houghton-Mifflin.
ロジャーズ、C.(2001)：ロジャーズ選集（上下）伊東　博、村山正治監訳編、誠信書房。
田畑　治編（1998)：クライエント中心療法　「現代のエスプリ」374　至文堂。
氏原　寛、村山正治（2000)：ロジァーズ再考：カウンセリングの原点を探る、培風館。

（原稿受理　2001年９月26日）